

亀井秀雄編

『増補 感性の变革』

東 海 義 仁

本書は、亀井秀雄氏の『感性の变革』に、関連する単行本未収録の論考と「自著総括」を加えた増補版である。

『感性の变革』はオリジナル版刊行時から世評が高く、書評も多いため、本稿では増補部分について紹介する。

第一部では『感性の变革』が英語に翻訳されることを機に、現代の若い日本の読者や、外国で日本文学を研究している人達の理解に役立てることを目指して「自著総括」が冒頭で展開される。『感性の变革』が書かれた時代の日本の文学理論の動向の解説するために、時枝誠記、三浦つとむ、吉本隆明の日本語表現に関する理論から紹介が始まり、それらの理論が外国の理論に十分に注意を払いつつも、日本語表現に即した理論をつくろうと試みた点で、「日本で自生した理論」であることを主張する。このような「日本で自生した理論」がどのような方向と達成を持つているかが明らかにになるだろう。前近代／近代という枠組みを乗り越え、日本の近代文学観そのものを再検討した名著『感性の变革』が入手困難となつて四半世紀以上経った現在に、当時どのような経緯で執筆

が為されたかを知ることができるようになっただけでも、この増補に軒並みならない価値があることは言うまでもないだろう。

第二部では、政治小説論系でまとめられており、既存の制度から逸脱した者たちでさえも、その関係の根幹には既存の制度の面影が残っていることを指摘する。そして自儘に欲望を追うふとで者の中に、ふとで者自身が戦慄しながら自身の正体を見ることになる。庶民の自然法的な犯罪観が近代文学では揺らぎ失われつつあることを指摘する。また、勧善懲悪が体制側から与えられたものであることを踏まえつつ、実際の犯罪ではないところから生まれる罪の意識が個人的な問題として描かれることを探る。罪の意識への自己欺瞞と他人への攻撃性を人間の本当の怖さとし、近代文学においてそれが戦後まで回避し続けられたことや、「公」と国家が別次元に存在しており、民衆が自身の「私」を棚に上げながら他人の「私」を抑圧しようとしたことを明らかにする。そして、共同規範に従って生きるべき公民達が、己の「私」的な欲求ば